

<鎌倉殿の十三人>

源義経と平時忠ゆかりの地をめぐる!

【行程】

小坂公民館(7時30分出発)====(別所SA[🚰]休憩)====(道の駅すずなり)====
 須須神社====<昼食・てんぞ>====重要文化財・上時国家====平時忠と一族の墳墓====
 能登平家の郷モニュメント====重蔵神社====(長谷部信連の墳墓・車窓)====
 西山SA[🚰]休憩====小坂公民館(20時00分着)



須須神社

須須神社は、三崎権現とも呼ばれ、能登半島の先端部分に近い場所にある。第10代崇神天皇の御代に創建と伝えられ、東北の鬼門で日本海の守護神として信仰と共に航行の目標とされてきた。

平安時代には、海上で異変があれば直ちに狼煙が上げられ、都まですぐに伝達される仕組みになっていたとも伝えられている。(半島の先端には「狼煙灯台」がある)

「源義経」をも護った須須神社には、天仁3年(1110)第74代鳥羽上皇の時代に、宋の皇帝から贈られてきた生きた蟬のような節の付いた笛(「蟬折の笛」)という名笛(めいてき)がある。

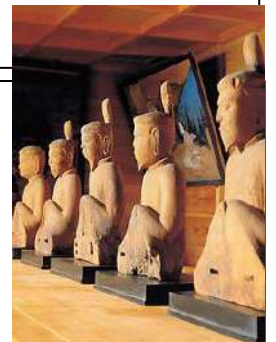


特別な笛として大切に守られていたが、ある時、高松中納言がこの笛を吹き、つい普通の笛と同じように膝下に置いたところ、それを咎めた笛が蟬の節のところで折れてしまった。それ以来、「蟬折の笛」と名づけられた。この笛はその後、平家から源義経の手に渡った。



文治3年(1187)、兄の源頼朝との不仲から追われる身となった義経は、奥州藤原氏を頼って落ちのびる際、大野(金沢市)から能登の珠洲岬へと向かう船に乗り込むことができた。途中、義経は、時忠の家で一泊し、時忠の娘の蕨姫(義経の側室)とも最後の親子対面をしたと思われる。その日の昼すぎ、珠洲の沖合で時化に遭い、三崎権現(須須神社)に無事を祈願したところ、荒らしが治まった。お礼のため船を岸に着けて参拝し、「蟬折の笛」を奉納した。

その時、弁慶も「左」と銘が彫られた「弁慶の守刀」を奉納している。いずれも神社の宝物館に保管されているが、義経一行の奥州落ちのルートを考察する上で、非常に重要な物証となっている。

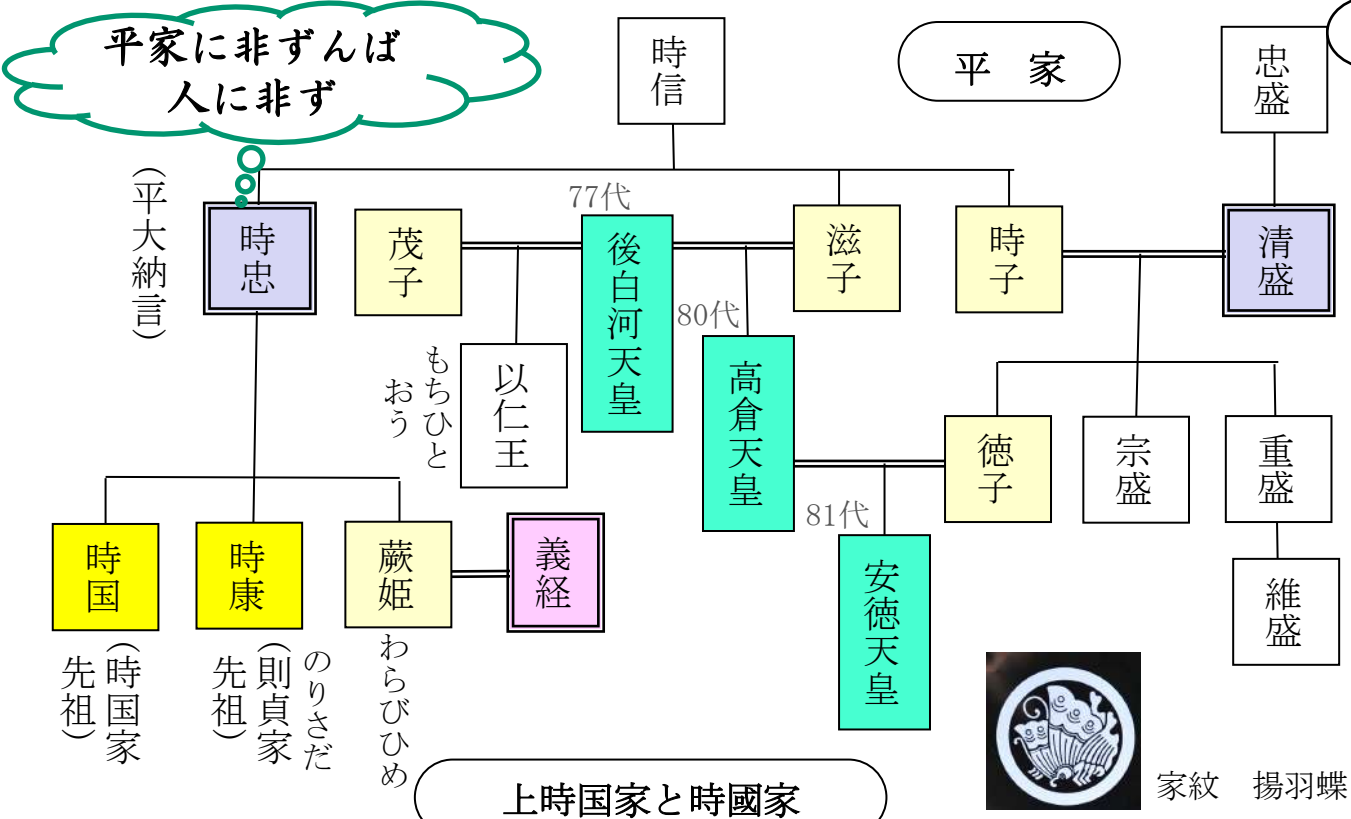


<宝物殿>


国指定の重要文化財「木造男神像」をはじめ、「蟬折の笛」「弁慶の守刀」が収められている。

<前田利家が能登巡見>

天正12年(1584)、利家が能登巡見の際、祈願所と定め、社領として神田5町歩(石高75石)を寄進し、武運長久の祈願を行っている。



- (1) この有名は発言は、大納言「平時忠」で平清盛の義弟であり、「上時国家」「時國家」の祖である。
- (2) 平安時代末期、平清盛によって栄華を極めた平家は、文治元年（1185）3月壇ノ浦の合戦で、源義経率いる源氏に破れ、時忠は生きて捕えられた。この時、安徳天皇は8歳で時子(清盛の妻・祖母)に抱かれ入水し、三種の神器も海に沈んだ。
- (3) 平家方生存者の殆どは、鎌倉幕府の厳しい追求の中、離散の生活を始めたが、生存者中最高重臣であった時忠は、
 - ①三種の神器の「神鏡」を義経に奉じた
 - ②娘の「蕨姫(わらびひめ)」を義経に嫁がせた
 - ③また、武士ではなく貴族である
 などから、死刑ではなく奥能登へ配流された。


- (4) 大谷浦まで船で護送された一行は、カラスに導かれて人里離れた現在の大谷町則貞の地で居を構える。近くに流れる川を「カラス川」という。
- (5) 時忠は、地元の娘との間に二人の息子をもうけた。長男の「時国」と次男の「時康」である。
- (6) 時折、早く都へ帰りたいたいと思ひ、和歌に託して訴えている。
 「能登の国 聞くもいやなりすずの海 また吹き戻せ いせの神垣」
- (7) ところが、事態が一転し、2年後の春に義経が能登経由で奥州逃亡を遂げていることを知る。
- (8) 赦免されて都へ戻っても、義経逃亡を助けた嫌疑で処刑されると思ひ、この地での定住を決意する。
- (9) 次男の「時康」は、大谷に留まったが、長男「時国」は町野庄(輪島市)に移り、自らの名を名字「時国」として一家を興した。

(10) 用心深い性格か誰かの助言かは不明だが、「死んだことにする」ことを決意し、文治5年(1189)2月24日死亡と鎌倉へ報告させる。(63歳)

しかし、時国家と則貞家の由緒書にはどちらも元久元年(1204)4月24日没とあり死んだふりしてから15年も長生きした。(78歳)

(11) 長男「時国」は、13歳頃まで父時忠により実力派貴族としての教育を受けていた。後の、時国家の急速な発展がそれを伺わせることができる。

隠れることをやめて表に出て前に進んだことが成功の鍵となった。

(12) 以降、時国家は代々の当主の努力によって土豪となり時国村を成し、室町後期になると海運や製塩を手掛け、奥能登に強大な勢力を誇った。

(13) 戦国時代を経て、天正9年(1582)、能登は加賀前田藩領に、その後慶長11年(1606)には時国村の一部が越中土方領となり、300石を有する時国村は、加賀藩領と幕府領(当初は土方領)に分かれた。



時忠と一族の墓と伝えられる五輪の塔は、今もなお、珠洲市大谷の山中に苔むして並んでいる。
(石川県指定史跡)

○上時国家(国指定重要文化財)



上時国家

幕府領の大庄屋である一方、北前船による交易を拡大した。幕末には千石船を5艘所持し、海運による収益は農業・製塩を大きく上回った。

上時国家住宅は、28年の歳月をかけて造営した屋敷である。幕末期、異国から開国の圧力が強まり、海岸防備が重要性となり、嘉永6年(1853)加賀藩13代藩主前田斉泰(なりやす)は、総勢700人を引き連れて500キロにも及ぶ22日間の能登巡検を実施した際の御宿となった。

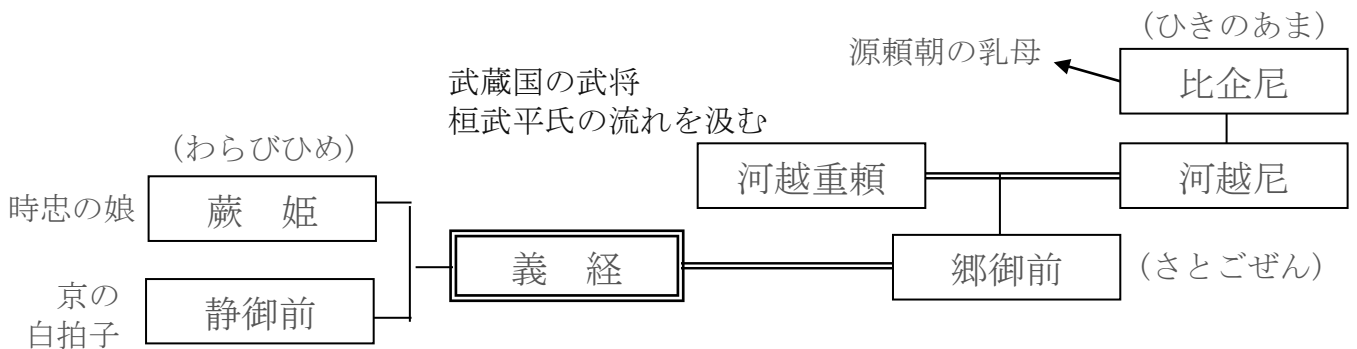
斉泰は、私は中納言、時忠様は大納言、この部屋へ入るわけにはいかない

○時國家(国指定重要文化財)

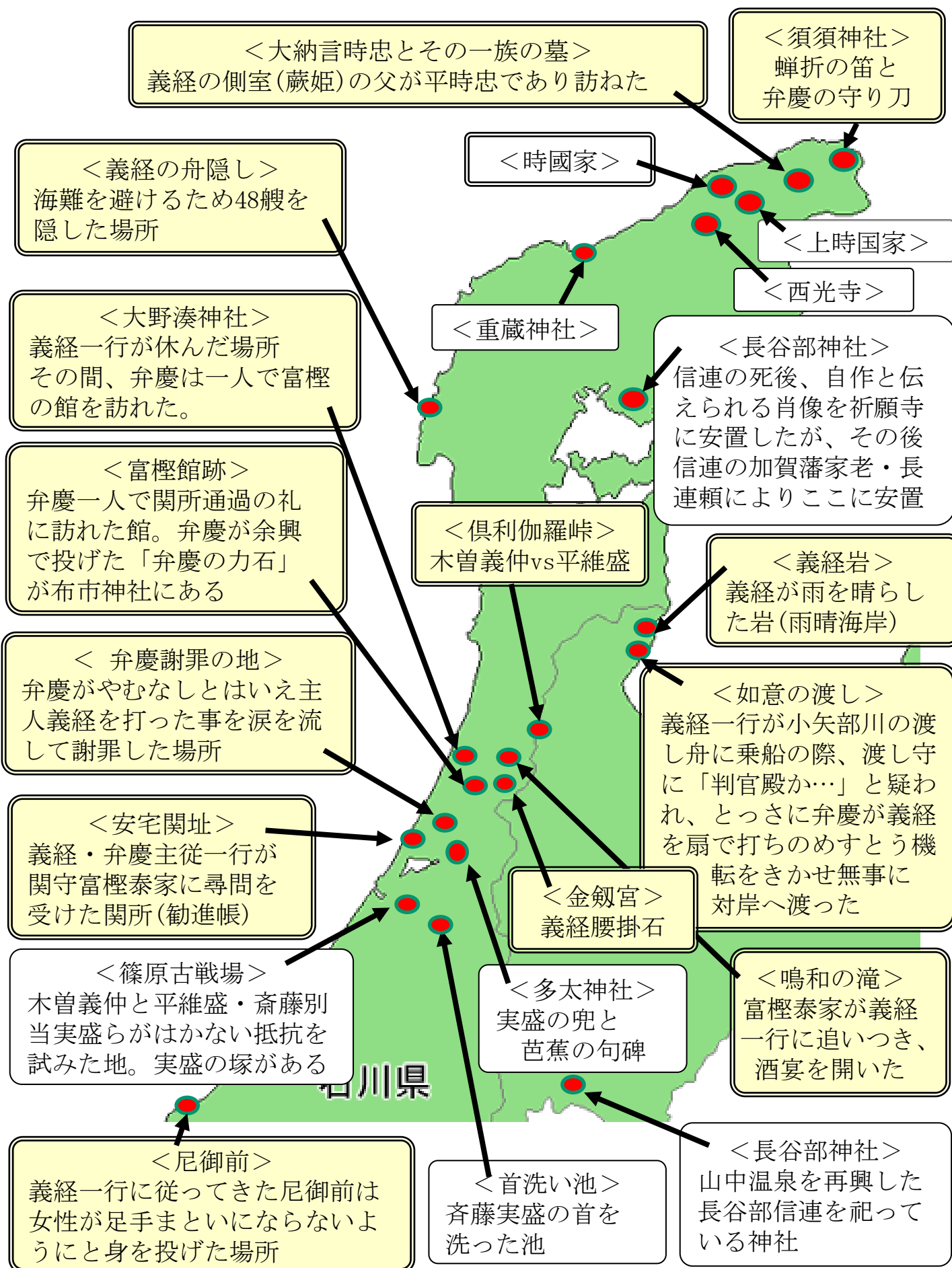
加賀藩領となった時國家は、代々藩の山廻り役や、塩吟味役(しおぎんみやく)などの役職を務めた。

時國家住宅は時国家の分立後に造営された家敷で、茅葺入母屋造り。

周囲に椎の木が茂る池泉鑑賞式の書院庭園には、5月になるとキリシマツツジが赤々と咲き誇る。



義経の北陸における足跡その他???



長谷部信連(のぶつら) 平家物語「源平合戦」で讃えられた武者

＜治承三年の政変＞(1179年11月)
平清盛がクーデターを起こし後白河法皇の院政を停止、鳥羽殿に幽閉する。

＜令旨の発布＞治承4年(1180)4月
後白河法皇の第二皇子、以仁王(もちひとおう)は、平家に不満を唱える源頼政の勧めで、各地の源氏に密に平氏討伐を呼びかけ令旨を発する。

＜以仁王の挙兵＞治承4年(1180)5月
しかし、平氏追討計画が発覚するや信連は以仁王を三井寺に逃がし自らは御所(高倉院)に踏み止まって追手の時間稼ぎをした。

＜信連合戦＞
その夜、300余騎の追手と一人で戦い、十人ほど倒したところで太刀が折れ、これを投げ捨てるが、もはやこれまでと自害しようとした脇差をさぐるも落としてしまう。そして、長刀で太腿を突かれ生け捕りにされた。

西光寺は、建仁元年(1201)に、信連の助成で源頼朝の勅願寺として「天下泰平を怠ることなく拝みなさい」と建立された。

※建保6年(1218)10月、輪島市山岸町で死去する。(72歳)



穴水町の長谷部神社は、信連公の自作の肖像座像を安置したのが始まりである。

三代目政連の時に姓「長」と改め、穴水城を築いた。
初代連龍(つらたつ)は、織田信長から能登一国を与えられ、その後、加賀一家の一人(3万3千石)となった。

山中町の長谷部神社

＜囚われの信連＞
六波羅に連行された信連は平宗盛らの取り調べを受けるが、以仁王の行方は頑として口を割らず、兵を十人余り殺し、斬罪が下されるところ、「死をも恐れず侍らしい堂々とした態度」が、平氏方に感銘を与えた。清盛も「弓矢を取る者の手本」と一命を助け、伯耆国(ほうきのに・鳥取県)に配流となった。



＜一方、以仁王は＞
以仁王を逃がそうとした源頼政は、平氏と戦うが力尽きて自害、以仁王も討ち取られ挙兵は失敗に終わる。しかし、以仁王の令旨が平氏討伐の大義となり源平合戦へと動いていく。

＜鎌倉から能登へ＞
源頼朝は、文治2年(1186)死罪を免れたという信連を捜し出し、御家人とする。その後、数ある荘園の中から能登国の大屋荘(輪島市から穴水一帯)の地頭職に配置した。
※それは、珠洲に配流された前大納言時忠を監視するためで、反平家意識の強烈な信連が最適であった。

＜地頭として活躍＞
建久元年(1190)に幕府の命で加賀国江沼郡の加藤成光を討ち、同郡塚谷保(山中町)を加増される。
山中温泉は、天平年間(729～749)に名僧行基が発見し、約450年後、信連が湯壺を掘ると薬師如来像が現れ、湯が沸き出した。そこに湯宿を開き家来を従事させた。





<鎌倉幕府の地頭 長谷部信連の墓>

鎌倉幕府がまとめ吾妻鏡には、「1218年10月27日、長谷部信連が、能登国大屋荘河原田（かわらだ）で亡くなる。」と書かれている。

また、輪島に残る古文書にも、江戸時代の1717年に、信連の墓をしっかりと作り直したと記されています。

<関東の御家人
長谷部信連（はせべのぶつら）>

1147年、遠江国（とおとうみのくに・静岡県）に生まれ、1186年以仁王のために戦ったが平家に敗れる。

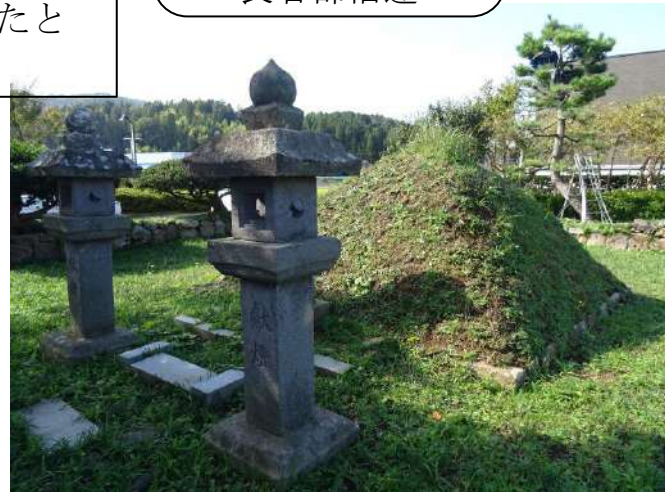
鎌倉時代、源頼朝の御家人となり、能登国大屋荘の地頭となる。

1190年には、山中町に領地を拝領した。



以仁王を見送る
長谷部信連

の図



<能登でただ一枚
中段(ちゅうだ)の板碑(いたび)>

輪島市中段町に、関東の石材(武蔵産)を用いた唯一の板碑があります。

板碑とは、鎌倉時代の終りころに武士の間で広がった物です。

板碑が造られる目的は、「死者の追善供養とのため極楽浄土への往生を主眼とした供養碑」のことです。

高さは129cm、埼玉県の石が使われ、正応5年(1292)の年号が刻まれ、能登に残る多くの板碑で、ただ一枚の関東系の板碑です。

